

---

# 王国キット

早瀬恭一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

王国キット

### 【Nコード】

N4288V

### 【作者名】

早瀬恭一

### 【あらすじ】

鉄と油の臭いの混じる王国”ダル”

油石と呼ばれる資源を求め、各国から人々が集まるこの街で、油石に関わる特殊な任務を行う部隊の一人にヴァンという少年がいた。ヴァンには、他人の思考をイメージとして読み取る力があつた。彼はその不思議な能力を生かしながら、時には命の危険に関わる任務をこなしていた。

ある日仕事を終えたヴァンのもとに一人の少女が現れる。そして、その出会いを引き金とするように、彼は王国の闇へと繋がる事件に巻き込まれていく……。

## 『油石の守り手』

乾いた平原。背の低い草木。ごつごつした岩。

周囲の山から流れ込んだ水が湖となり、遠くから、鉄と油の混じった匂いが漂ってくる。その湖を背に大小二つの城壁に囲まれた宮殿がそびえ立っており、そこから扇状の街が広がっていた。

その城から湖に沿ってしばらく歩くと、市民の立ち入りが禁止されている街の東側にたどり着く。そこには、まるで神様が地面をすくったんじゃないかと思うような深い半円の穴が空いていて、穴の底からは赤茶けた泥が湧き出るように採れた。

火を着ければごうごうと燃え盛るその泥は、当時木材や石炭が資源の中心であった周辺諸国において高値で取り引きされ、異国の商人たちはありったけの商品を引き連れてこの街を目指した。中でも、泥の純度を高めた上で特定の温度と圧力で圧縮し固形したものは、宝石と引き換えになるだけの価値を持っていた。

『ダル』と呼ばれたこの街に、今日もまた、砂漠からの乾いた風が届く。

「目標は建屋を出て東に向かってている。さっきまで聞こえた石をどかさような音はもう聞こえないな。廃墟の中、一人つきりで何かを探していたらしい。ヴァン、奴の姿はどうだ？」

今では使われなくなった建物が立ち並ぶダル旧市街地のとあるアパートの屋上。かき上げた短髪のかせ毛と、だらっと着た白いシャツから覗く焼けた肌が特徴の男が立っていた。

隣には、ヴァンと呼ばれた、長身と力強い眼差しが大人びた雰囲気をおぼせる黒髪の少年が、肌を撫でる温い風を押し返すように答えた。

「茶色のフードで顔を覆っていて表情は見えないけど、口元に髭が生えているから男じゃないか？ あと、腰に水の入ったボトルを付けてる。最近街に入ったか、それともこの街から出て行くつもりだろう。この距離だと、細かい所までは見えないな。どうする？」

「残りは奴をとっ捕まえた後で調べればいいさ。こんな仕事さつさと終わらせて俺は帰るぜ？ 城に帰った後で、お前は好きなだけ奴の思考を読み取ってればいいさ」

そう言うと、短髪の男は得意のにやけ顔を浮かべた。その表情に嫌味を感じさせないところが、この男の特徴だろう。

「他人の思考を読み取るのが楽しいわけないだろ？ あれは濁った海に潜るようなもんなんだ。ましてそこから宝を見つけてこいなんて、いつそ海が干上がるのを待ってる方がよっぽど利口だ」

「海が干上がった所でお前の仕事は変わらないさ。泥水に潜るか、ヘドロに手をつ突っ込むかの違いでおまえは汚れ担当なんだよ」

「まったく……。たまには透き通った湖で泳がせるよ」

はあ、とヴァンが息を吐くと同時に、1 kmほど離れた建物の屋上でチカチカと何かが光った。ヴァンの隣にいた男がスツと意識を光の方向へ集中すると、その耳に普通の人間には聞こえない甲高い笛の音が届いた。光で事前に合図を送る場合は、長い指令であるこ

とが大半であるため、彼は胸元から紙とペンを取り出すと、音の高  
低と長さから成る暗号な言語へ変換し一字一字メモに残し始めた。

ヴァンはそのメモを横で覗き見ながら、殴り書きの汚いメモから  
指示の内容を読み取った。

（なになに……。ポルトギー無駄口を叩くのも大概にしる。広場で  
襲撃を行う。お前たちは背後に回り込め）

ヴァンが顔を上げると、メモを取り終えたポルトギーと目があっ  
た。

「なんで俺だけ怒られるんだよ」

「それがポーの担当だろ？」ヴァンにはやけ面を返した。

ポルトギーがメモを懐にしまっている間に、ヴァンは屋上の反対  
側へまわり、そのまま地上へと飛び降りた。地面に着地する瞬間、  
ヴァンの脚部を覆うように装着されたプロテクターから白い蒸気が  
吹き出して着地の衝撃を抑え込んだ。

（最新鋭の装備とはいえ、飛び降りる瞬間は何度やっても慣れない  
な）

先月支給されたばかりの脚部プロテクターを見ながらヴァンが呟  
いた。専用の職人が作動を確認しているとはいえ、所詮人間の作り  
上げたものだ。プロテクターが誤作動を起こし着地と同時に両足が  
吹き飛んだって不思議じゃない。

（命を天秤にかけて働いて、いったい何が欲しいんだろうね）

そんな感傷に浸っていると、蒸気を吹かせたポルトギーがすぐ傍へと振ってきた。着地の瞬間に吹き出す空気のせいで、ヴァンの背中が砂にまみれた。

「はははっ。相変わらずお前の着地は腰が引けているな。もっと俺みたいにスマートにできないのか？」

「……いい加減、俺の側に着地するのはやめろよ」

諦めた顔つきでついた息は、砂の味がした。

ヴァンは周囲に舞い上がった砂の向こうを探った。ヴァン達が身につけている装備はごく一部の人間にのみ使用を許されたものであり、街の住人であつても知らない人間の方が多い。人の出入りが制限されている旧市街地とは言え、抜け道を通つて入り込んだ浮浪者や危険知らずの子供たちが建物の中に潜んでいる事があり、前者なら牢獄行き、後者なら記憶の消去を行わなければならない。

周囲の気配を探り終えたころ、再びポルトギーの耳に笛の音が届いた。今回の指令は短く、2つの単語の繰り返しだった。

「はあ!？」指令を受け取ったポルトギーが珍しく動揺を見せた。

「ポー。驚いてないで指令の内容を教えろよ」

冷静を装いながらも、ヴァンは自分の声が微かに震えているのを感じた。ポルトギーがここまで驚愕をあらわにするほどの内容だ。都合の良い指令であるはずがない。

「指令の内容は”機密”と”強制排除”だそうだ」そう言い放ったポルトギーの顔からは、いつもの緩い雰囲気が消えていた。

「機密かよ」

その単語が、油石の濃度を示すランクの中で最も高位にあたることなど、互いに確認するまでもなかった。

先ほどまで監視していた男が歩いた道をなぞりながら、ヴァンは鼓動の高鳴りを聞いていた。最先端の武装を身につけているとはいえ、体の大半は普通の人間と変わらない。

しばらくすると、建物の陰から覗いた道の向こうに、先ほどのフードを被った男の姿が見えた。その先には、今は使われていない噴水と、新市街地へと延びる大通りがあった。旧市街地は複雑に入り組んでいるため、土地勘のない人間はこの広場を目印に行動することが多い。

（やっぱ、この街の住人じゃないな）

そう思った次の瞬間、ギョツと心臓を捕まれたような音の圧力と共に砂のカーテンがヴァンたちの視界を遮った。ヴァン達とは別の舞台が撃ち込んだ手のひら程度の鉄球は、膨張した油石の圧力によって地面の形を変えるほどの運動量を持っていた。移動式の砲台を扱う狙撃班。その砲撃を足元に受ければ、大抵の人間は地面と熱いキスを交わす。

空へと拡散し続ける砂煙の影に、右腕を直角に、親指を立てるポルトギーのG○のサインを見つけると、ヴァンはポルトギーと共に土ぼこり舞う広場の中へと駆け出した。

「おいっ、奴がないぞ。まさか埋もれたか？」

二人が走り出したと同時に肌をなぞる生温い風が吹いて、それは箒で庭先を掃くように舞い上がった砂のかけらを取り除いていた。にも関わらず、広場には誰の姿も見当たらなかった。

「狙撃班がそんなミスをするとは思えない。油断するなよ、ポー」

「しかし、あの攻撃を受けて立っていられるとは」

思えない、と言いかけて、突然ポルトギーの体が真後ろに吹き飛んだ。

「ポー！」

相棒の元へ駆け寄ろうとする衝動をぐつと押さえ込み、ヴァンは依然として土ぼこり立ち込める広場の先を見続けた。おぼろげながらも、薄気味悪い洞穴の中で獲物が畏にかかるのをじっと待つ、そんなゾツとするイメージが伝わってきたからだ。

やがて視界の中に、妙な人影が映った。

ヴァンは右手に持っていた銃を両手で構えた。しかし、引き金を引こうとした瞬間、そこに人影はなかった。

「！」

驚くヴァンの視界の端に、自分を捕らえる銃口が見えた。「やばいっ！」そう思い咄嗟にしゃがんだヴァンの頭上を高速の物体が掠

めた。”ドン！”という鋭い衝撃音の後で、岩が崩れるような音が背後から聞こえた。

「しくじったか」

実際に聞こえたわけではないが相手の焦った口元がそう言っていた。自分の持っているものと同じで、次の弾を補充するのに多少の時間がかかるようだった。

男は、懐からいびつな刃を持つナイフを取り出すと、一直線にヴァンに突っ込んできた。互いの距離は、全力で走っても10秒はかかるだけ離れていた。だが、その男はほんの数秒でヴァンの目の前に迫ってきた。

「冗談きついで」

焦る気持ちを抑えつつ、ヴァンはしゃがんだままの姿勢で両足のプロテクターを手でなぞり、くるぶしの少し上から垂れ下がったピンを抜き取った。

フードの男が、その右手に持ったナイフでしゃがんだヴァンの目を切り裂くよう一閃した。その瞬間、ロープ姿の男が見たのは、しゃがんだままの姿勢から自分を飛び越すまでに跳躍したヴァンの残像だった。油石の小規模な爆発を制御することで、しゃがんだままの姿勢から一転してフードの男の頭上へと舞い上がったヴァンは、目を見張り、自分を見上げる足元の男の頭をプロテクター付の足で蹴り飛ばした。

焼けた地面に倒れたフードの男。近寄って意識を探してみると、音の飛んだレコードのように痛みが伝わってきた。意識はな

いようだ。

「はああ。なんとか片付いたか」

倒れている男の体を手錠で拘束し、ロープのうちポケットや男の体を探る。油石を回収しるとの指示だったが、それらしき物は見つからなかった。

「どこかに隠したのか？ 意識が戻った後で聞きだすしかないな…」

そう判断すると、ヴァンは向こうの地面に転がっている親友の元へと駆け寄った。

その一連の騒動から十分ほど経った後、広場には数名の人間が集まっていた。その中の一人、細い目と対照的な太い眉毛が獣を思い起こさせる40前後の男がヴァンに近寄ってきた。

「ご苦労だったな」

「隊長」

「ポルトギーの様子はどうか？」

「先ほど救護班への搬送が完了しました。命に別状はありません」

「そうか。それは残念だ」

その言葉にヴァンは少しだけ驚いた。目の前の男”デルテロ”は先ほどのような作戦中も城での訓練でも常に威厳をまとうっており、

こんな皮肉めいたジョークを言うなど想像もしていなかったからだ。しかし、そんな驚きもつかの間。ヴァンはデルテロに聞かなければならないことを思い出した。

「それで、奴の持っていた油石は？」

先ほどから、辺りの搜索を指示する気配がない。油石の在り処について既に目星をつけているとしか思えなかった。

「今回の詳細は明日城で報告する。お前は装備を返却し、自宅で待機している」

そう言っつて早々に立ち去るデルテロの背中を見つめても、彼からはどんなイメージも読み取ることができなかった。

## 『油石の守り手』（後書き）

前回の作品から、約一年ぶりの連載となります。

過去の投稿と違い、多くのキャラクターが登場する長編小説になります。ようやく最後までプロットが完成したので連載を開始しました。

相変わらず連載のペースは遅いのですが、キリンになったつもりで読んで頂ければ幸いです

## 『Stairs to mystery』

甲高い鉄の棒がぶつかる音が響く新市街地の一角。油石の対価として他国から買い付けてきた鉄や銅などを用いて、伝統的なレンガ造りの建物から強度と加工性に優れた金属が主流となっていた街の中で、未だレンガの面影を残す場末の酒場がヴァンのお気に入りであった。その店の奥にあるテーブルでヴァンが二杯目のウイスキーを注文したところ店の入り口が開きポルトギーが何食わぬ顔で入ってきた。

「ポー、よく救護室から抜け出せたな。大した傷じゃなかったとはいえ、検査に半日はかかるだろう？」

「あんな退屈な部屋にいてたまるか。俺の話術を持っていれば、看護婦を説得するのなんざ楽勝さ」

「まったく。そのキレを仕事に見せてくれよ」

「なら次の対象がいい女であることを祈るんだな」

琥珀色の液体をヴァンから奪い取ると、ポルトギーは得意の笑顔を浮かべた。

「しかし、ポー。最近変だと思わないか？」

「なんのことだ？」

「近頃、高濃度の油石が多すぎる。今回の一件だって、一年前も前

なら大騒ぎになってもおかしくない代物だ。それがここ数ヶ月の間にいくつも報告されている」

「技術は進歩し続ける。一年もあればこの街は全くの別物に変わっちまう。それは精製技術だって同じことだろう？」

「だけど、高濃度の油石を精製するには相応の設備が必要だろ？この街で何かが起こってるとしたら考えられないよ」

「何かって何だよ」

「それは、わからない。でも大きな力が働いていることは確かだ」

「大きな力？ 質のいい油石が作りやすくなるおまじないか何かか？ それとも、神様が気まぐれを起こしているとでも言うのか？」

「……」

「お前は考えすぎなんだよ。そんなだから、まともな女の一人も作れないんだ」

「おいつ、それは関係ないだろ」

「大有りさ。それだけで人生の3割は損してる。食って、抱いて、寝て、起きてを繰り返すのが正常な人生ってもんさ。油石なんてその合間に考えてりゃいいんだよ」

「そんなこと言って、隊長に聞かれたらケツの穴に油石をぶち込まれるぞ」

「油石が便秘解消に役立つかいい実験になる」

「まったく」

その後ヴァンは、いつもの他愛もない話とポルトギーの自慢話で時間を過ごし、バーのマスターに店を追い出されるまで居座った。酒場を出てポルトギーと別れた後は、自分の家に向かってフラフラ歩いていた。事件のあった直後なのでいつもより神経がとがっており、そのせいでアルコールを取り過ぎたらしい。最低限の警戒を行いなから、人通りの少なくなったメインストリートを曲がって小さな路地に入る。暗闇の中を進むと見えてくる、真新しいアパートの二階が彼の住処だった。

階段を上りながらドアの鍵を取り出そうと、ズボンの後ろポケットに手をつ込んだ。階段を昇りきり、廊下の角を曲がったところでヴァンは自分の家の前に誰かが座っているに気がついた。

（事件の後ほど気をつける。……隊長の口癖だったな）

薄い雲に隠れた月が照らすアパートの廊下は、まるで初めて通る道のように不気味に感じられた。

警戒を悟られぬよう鍵を取り出すフリをしながら、ベルトにかけられた銃の位置を探った。

「そこは僕の家なんだけど、どいてくれないか」

ヴァンは、自分が酔っていることを隠すため、発音に気をつけながらドアの前にいる人物に語りかけた。すると、膝を抱えてうずくまっていた顔が少しだけ持ち上がり、ゆっくりとした動きでヴァン

の方を向いた。

「あなたが　ヴァン？」

名前を呼ばれヴァンは動揺した。元々、自分の住処を人に話す性格ではないし、加えて、今の家に移ってからそれほど時間が経っていない。この場所に住んでいることを知っている人間は限られている。

「そうだけど、どこかで会ったことがある？」

そう平静を装いながらも、右手は銃のグリップを握っていた。

ヴァンの言葉を聞くと、その不審者は再びうつむいてしまった。互いの沈黙の中、昏間とは違い少し肌寒く感じる風の感触だけが妙に際立っていた。

ヴァンが次の言葉を捜していると、ふと周りの風景が光を取り戻した。雲間に隠れていた月が再びダルの街と向かい合ったようだった。

その光を浴びて命を取り戻したのか、見知らぬ訪問者は突然立ち上がり、ヴァンと向かい合った。

綺麗な瞳だ。まず思ったことはそんなことだった。薄い赤をガラスに溶かしたような瞳は、目にした者の心に糸を縫いつけるような不思議な魅力を持っていた。

よく見るとそれは16〜17歳程度の女だった。その見覚えのない女は、肩が動くほど大きく息をした後で、

「私をかくまっつて欲しいの」

と、少し震えの混じる声で告げた。

それから暫くの間、ヴァンは何も言わず相手の目を見据えた。何を目論んでいるのかを確認したかったからだ。

人は、相手の発する言葉の響きや瞳孔の具合から、その言葉の真偽や思惑を読み取ることができる。ヴァンは、それに加えて相手に意識を集中することで、もやのような景色を読み取ることができた。今の仕事も、その能力を買われてのことだった。

しかし、なぜか目の前の女からは何の感情も読み取ることができなかった。いくら意識を集中しても、どんなイメージも掴めず、代わりに脳をチクツと指す痛みが襲った。これと同じような感覚を、ヴァンは何度か味わったことがある。

（ポルトギーや隊長のときと同じだ。思考を読み取れない側の人間か）

イメージを読み取れる人間と読み取れない人間。今までも何度か、両者を分かつ原因について調べたことがあるが、結局よく分からなかった。

これ以上目の前の女を見つめても何の進展もないため、その真意は言葉を使って聞きだすことにした。

「助けが必要なら城に相談すれば？ それと、俺のことを誰から聞

いた？」

言った後で、少し口調が厳しすぎたか？ と後悔した。胡散臭い相手だけに、優しさを付け忘れた。

「それは、後で話すわ」

「今、教えてもらえると助かる」

「それより、早く家に入れて頂戴。こんなに夜が寒いなんて、知らなかったわ」

「ん？ この街の人間じゃない？」

「……」

そこで二人の会話が途切れた。

ヴァンはますます目の前の存在を疑った。ダルで生まれ育ったヴァンは、他の街に行ったことがない。他国の人間となると、市場にいる商人くらいしか知らない。その中にこんな口の奴がいた覚えはなかった。

（事件のあった後で、素性の知れない人間からの接触。城に引き渡した方が無難だな）

そう考えたヴァンは、その女を家の中に入れることにした。隙を見て城に連絡を取り、警備兵が来るまでの間は下手に刺激しないでおこうと考えた。

ヴァンはポケットから鍵を取り出すと、鍵穴に差し込んだ。

「ひとまず、中で話を聞くよ」

「なら始めからそうしなさいよ」

両手で服についた埃を払いながら、ボソツと女が呟くのが聞こえた。

明日は朝から城で今日の事件の解析結果を聞く必要がある。ポルトギーの自慢話など聞かずに、隊長の指示通りさっさと家に帰れば良かったと今更ながら後悔した。

ヴァンは家の中に女を通すと、部屋の中心に置かれたテーブルの上にある照明に火を入れた。暖炉にも火を入れると、18畳ほどのリビング全体が赤褐色の光で照らされた。

「今飲み物を出すから、ソファアにでも座って」

「わかったわ」

素っ気ない返事だったが、その表情は少しリラックスしているように見えた。

（やっと家の中に入れて安心したのか？ ま、笛は手元にあるわけだし。後は城に連絡を取るだけさ。どんな事情があるにせよ、城で保護してもらう方が危険は少ないだろう）

ヴァンはそう自分に言い聞かせた。家の中を物珍しそうにキョロ

キヨ口見渡す姿を見て胸の中の良心が多少ざわついたが、今は仕事で大きな事件が続いており、これ以上の厄介事は避けたいと言うのが本音だった。

ヴァンは左の腰に付けてある小さな鉄の板に手をかけた。板には、息を吹き込む穴が空いており、通常の人間には聞こえない音色が鳴るように出来ている。ヴァン自身にも音は聞こえないが、ポルトギーヤ城の一部の人間は音を拾うことが可能で、この音のパターンによって言葉のやり取りができた。音を拾えるポルトギーが側にいないため、城にいる連絡班に一方的に話しかけることしかできないが、兵を呼ぶだけなら問題ない。

この技術も一部の人間だけが知っているものであり、連絡中の姿を見られても、相手はヴァンが鉄の板を加えているようにしか見えないはずである。

一応下手に勘繰られないよう、また音が城に届きやすいように、キッチンの勝手口から外に出ることにした。

「飲み物はコーヒーでいい？ 今入れてくるから、そこで待ってて」「そんなことを言っつて、他の誰かに連絡を取ったら、どうなるかわかってるでしょうね？」

ヴァンの思惑はあっさり見破られた。しかし手品の種が分からなければいくらでも騙しようがある。

「家の中からどうやって連絡をとるんだよ？ 君は少し勘繰りすぎだ」

ヴァンは、今日一番の笑みで優しく語りかけた。

「あなたの腰についているその笛。城に連絡を取るためのものではない？ 連絡を取らないというならここに置いて行きなさいよ。」

その言葉を聞いて、咄嗟に手が動いた。両手で銃を構えると、女の胸の辺りに狙いを定めた。優しさを頭の中から追い出した、仕事の顔つきに変わる。

「誰だお前？」

威嚇するようなヴァンの声。

「いきなり武器を向けるなんて失礼よ？」

すると、少し怒ったような視線が返ってきた。

「この街の人間じゃないみたいだが、なぜ笛の存在を知っている。何が目的でこの街に来た？」

「あら、私がこの街の者でないといつ言ったかしら？ 確かにここ数年は他国へ留学していたけれど、れっきとしたダルの生まれよ？」

「留学？」

ヴァンはもう一度女の身なりを観察した。肌に張り付く白のインナーに上質な青の布を羽織り、下は足を覆い隠す長いスカート。確かに、この街では見かけない身なりしている。

「どこかの貴族の娘？」

笛の秘密を知っており、さらに留学するだけの財力を持っているとなると、候補は限られてくる。どの家系に年頃の娘がいるか、仕事以上に熱心な調査をしていたポルトギーの自慢話を、もう少し真面目に聞いておけば良かった。

「いや、違う。貴族の娘なら、どうして自分の家に帰らない？」

自身に問いかけるように、ヴァンは質問をぶつけた。一方、女は

「家出中なの」

ヴァンの反応を楽しむようにケタケタと笑っていた。

ヴァンは戸惑いながらも、もう一度目の前の女を観察した。

(身長は140ちょい。顔は、綺麗な顔つきだが子供っぽさが残っている。あとは……)

胸元は残念だな、と思った。

相変わらず不審者であることに変わりはないが、暗殺者やスパイにしては言動がお粗末だった。まずは態度を改めて、女の話を書くことにした。

武器をベルトにかけ直し、近くにあった椅子に腰をかける。一呼吸おいて、今度はゆっくりとした口調で質問した。

「……それで、留学から帰ってきたのに、どうして家に帰らないんだ？」

ヴァンの態度が変わったことを察したのか、女の顔が曇った。

「家には、帰れないの。『帰るべきじゃない』って」

「帰るべきじゃない？ どうして？」

「分からないわ。留学中に、いつも手紙を送ってくれた人がいて、その人が『あなたのところに行きなさい』って」

それを聞いて、ヴァンはますます混乱した。剣と伝統を武器に国を守る貴族とは、ほとんど接点なく生きてきたつもりだった。

「手紙の送り主に心当たりは？」

ヴァンがそう言うと、女は首を振った。

（普通、差出人不明の人間の言葉を信じるか？）

相手の言葉を信じるには、時期尚早だと感じた。

しかし、そこまでして自分に取り入ろうとするメリットも浮かばなかった。職務を遂行する間身に着ける最先端の装備は、仕事が片付いたら城の保管庫に返すのが常であり、仕事で手に入れた油石はデルテロが管理している。一般人よりは賃金の高い仕事に就いているため、暖炉には低密度に精製された油石を利用しているが、それも市場で買った物であり、わざわざ盗みにくるような価値はない。

あれこれ考えを巡らせていると、女はゆっくりとソファーから立ち上がった。ドアを探しているようだったので、トイレだろうと放

つておいたが、見当違いの方向に歩き出したので声をかけた。

「そっちのドアは寝室だ」

すると女は、少しだけ首をひねり、

「今日は疲れたわ」

という言葉を残して部屋の中へと消えていった。

拒否する間もなく自分の寢床を占領されたヴァンは、仕方なくソファーに寝転ぶと、拳銃の手入れをした後で横になった。寝室のドアには火掻き棒を立てかけて置いたので、女が部屋から出てくれば音が鳴る。寝込みを襲われる心配は少ない。

( ippitai、この街で何が起こっているんだ?)

頑丈に閉められた遺跡の一部屋。そこから地下へと続く階段を見つけたときのような、常識の通用しない世界に対する恐怖と、胸の内パチパチとはじける好奇心を抑えながら、やがてヴァンは眠りに落ちた。

## 『日常と非日常の交わる手紙』

翌日、ヴァンはいつもよりも少し早い時間に目覚めると、真つ先に寝室のドアに目をやった。昨晚立てかけておいた棒は、そのままの状態ですらドアに寄りかかっていた。

(とりあえず、夜中に起きた形跡はなしか……)

足音を消しながらドアに近づき、そつと火掻き棒を掴むと暖炉の脇に戻した。物音で女が目覚めないよう身長に部屋を動きながら身支度をし、「仕事に行ってくる」という簡単なメモを残して部屋を出た。

事件によっては数日間家を空けることがあるヴァンにとって、住居は誰にも邪魔されず休息をとるための場所であり、貴重品は常に身につけているか、家よりも安全な場所に預けてある。藪をつついて朝からひと悶着を起こすよりも、遅れずに城に出勤する方を選んだ。

街の中心部まで足を運び、市場でミルクと焼きたてのパンを買った。まだ開店していない服屋の前に座りやすそうな階段を見つけると、時間を食べるようにゆっくりと朝食をとった。

やがて、市場に活気が灯り始めた頃、朝を告げる鐘の音がダルの街に響き渡った。元々は敵の襲撃を知らせるために作られたものだが、いつからか、一日の始まりを告げるダルの街の風物詩になっていた。その鐘の音を合図に、ヴァンはゆっくりと立ち上がると城に向けて歩き出した。

市場から20分ほど歩くと、すっかり見慣れた城の入り口が見えてくる。高くそびえる城壁と城壁の間。オブジェのように微動だにしない兵士が守りを固める門をくぐり、城壁の内側へ入る。目の前には真っ直ぐに伸びた石畳と、その先には二つ目の門が見え、緑が茂る左右の芝生では朝早くから剣術の稽古を行う兵士たちの姿があった。

「あいつらは毎朝元気だな」

と、あくびを漏らしながら道なりに進み、城の内部に入った。

そして初見では必ず迷う複雑な通路を辿り、ようやく自分の仕事場に着いた。

ノックの後でドアを開けると、既に何人かの同僚がいた。

「おはよう」

誰に向けたわけではなく、むしろプライベートから仕事へと気持ち切り替えるための合図だった。しかし今日はその中の一人が反応した。

「おはよう、ヴァン。昨日はすまなかつたな」

身長185cm、体重80kg程度の筋肉質の男。正確な名前は聞いたことがないが、隊のメンバーはマルと呼んでいた。

「昨日？ 何のことだよ？」

まさか例の女に関して知っているのではないかと、一瞬心がざわついた。

「昨日、俺たちが狙撃に失敗したせいで、おまえを危険な目に遭わせちゃった。すまなかった」

その言葉に、ヴァンは期待外れに対する落胆と不思議な安堵を感じた。

「昨日のは気にしないでくれ。あいつは妙な動きをしていたんだ。狙撃が外れても無理はない」

「そう言ってもらえると助かるよ」

そのゴツい見た目とは裏腹に、誰よりもメンバーのことを気にかけるのがマルという男だった。

「そうよ、あまり気に病む必要はないわ。ポルトギーが怪我したのは、彼自身の落ち度だわ」

部屋の一番前に座っていた女”ルチア”が、体を半分だけひねり、会話に割り込んできた。

「大体、貴方たちは無駄口が多すぎるの。行動中にも関わらず、どれだけでもない会話をすれば気が済むの？」

まったく、と言いたげな表情を見せた後、ルチアは再び前を向いてしまった。

彼女はポルトギーより少し年上で、隊の中ではデルテロを除けば最も年長者である。目の良さと読唇術を武器に、デルテロの補佐・秘書としての役割を担っている。他の班の動向を監視し、会話の内

容を逐一デルテロに報告している。

ポルトギーの無駄口の多さには同意なので、ヴァンは特に言い返すことなく部屋の後ろに座った。

それから10分ほどすると、ポルトギーが入ってきた。途中ルチアが遅刻を咎めるような視線を送ったが、それに気づいていながら素知らぬ振りでもやり過ぎあたりは普段と変わらぬ光景である。後は、デルテロが現れるまでの間、隣に座ったポルトギーから他愛もない話を聞けば日常を再現できるはずだった。

「おい、ヴァン」

やけに小さな声でポルトギーが話しかけてきた。

「昨日の帰り、尾行されなかったか？」

いつにもなく、真面目な口調だった。

「尾行？ そんな気配はなかったけど？」

「そうか……。いやなに、俺の勘違いならいいんだ」

そう言うとポルトギーは手で自分の口元を覆うようにし黙り込んでしまった。真剣な表情だったので、なぜそんなことを言い出したのか聞こうか迷っているうちに、デルテロが現れてしまった。

「揃っているな」

そんな短い挨拶の後で、今日の任務について話し出した。

「昨日捉えた男についてだが、まだ取り調べが終わっていない。しかし、職人の誰かと接触し油石を手に入れようとしていたようだ。相手の名が割れ次第、その職人から事情を聞く。今のうちに突入経路を割り出しておけ」

「突入経路の割り出していて、容疑者が分からない状態でどうしろってんですか？ まさか、全部の職人の家を回れとでも？」と、ポルトギーが口をはさんだ。

「その通りだ」

表情を変えることなく、デルテロがそう答えた。

「容疑者の名が分かってから行動したのでは遅すぎる。本来、油石の機密を護るお前たちは、職人の数、住処、各々が得意とする精製技術といった情報は当然把握しておかねばならないはずだ。これを機に、油石の作り手に対する意識を高めろ」

「マジ？ 勘弁してくれよ」

すっかりうなだれたポルトギーが、デートがどうかブツブツ文句を言っていた。

「マル、シエーラ、お前たち2人は西側の職人からあたれ。ルチア、ポルトギー、お前たちは東側だ。それぞれの職人の特徴、交友関係、そして突入を想定した人員配置を報告しろ。以上だ」

一人困惑するヴァンを残し、それぞれのメンバーが席を立った。ポルトギーが去り際に「おまえ、何したんだ？」と問いかけてきた

が、特に思い当たる節は、あまりなかった。

メンバーが部屋から出ていき、ヴァンとデルテロだけが残された。静かに目を瞑って微動だにしないデルテロに痺れを切らし、ヴァンが口を開いた。

「それで、私は何をすれば良いのでしょうか？ 解析班に加わり、昨日の男の思考を読み取れば良いのでしょうか？」

するとデルテロはゆっくりと目を開き、ポケットの中から白い封筒を取り出すとヴァンの元へと歩いてきた。

「お前には暫くの間、別行動を取ってもらう。この手紙をお前の家にいる婦人に渡せ」

あの女の事を知っている！ が、それ以上に、見知らぬ女を家に上げたことを何と説明しようかと気が気でなかった。

「ヴァン。お前がこれから就く任務は二つある。一つはあの婦人の護衛だ。何があっても護り通せ。またお前の家にいるという事実を誰にも悟られるな。周辺の住人はもちろんのこと、隊のメンバーにも違和感を抱かせぬよう行動しろ」

何か質問は？ と言いたげな目を向けてきたので、ヴァンは昨日から最も気になっていたことをデルテロに尋ねた。

「あの女は何者なのですか？」

「今は答えるべき時ではない」

そう一蹴するとデルテロはヴァンに背を向け、「今日のところは体調不良と言うことにして帰宅しろ」と言い残して部屋から出て行った。

残されたヴァンは、釈然としない気持ちのまま城を後にした。

こんな真昼間に家路に向かうことなど今までなかったせいか、商人と主婦で賑わう市場に疎外感を覚え、そそくさと広場を抜けた。

やがて人通りが少なくなる裏路地に差し掛かると、道の向こう、普通の視力では見えない距離に捨ててある鏡の破片に目を凝らした。鏡に映る自分の背後の風景に怪しい人影がないことを確認すると、見慣れたアパートの階段を上り、今日に限ってやけに重く感じるドアに鍵を差し込むと、音を立てぬようそっと開けた。

ドアノブをゆっくりと戻し、耳をすませながら廊下を進んだ。しかし、家の中からは何の物音も聞こえなかった。

ドアは鍵がかかっていたから、例の女は家の中にいるはずである。

明かりの点いていないリビングに入り寝室のドアに目をやる。扉は閉まったままで、近づいて耳を澄ませも物音一つしない。

「人の家でよくこんなに寝てられるな」

そうぼやきながら振り返った瞬間、ソファアに横たわる死体を見つけた。

「うわぁー！」

ヴァンの本気の驚きを合図に、死体が喋り出した。

「……あなた、私を放って出かけるなんて、なかなか勇敢なのね」  
今にも泣き出しそうな声でも、威圧感は込められるんだなあ、と  
跳ねる心臓をなだめながらに思った。

「明かりも点いていない他人の部屋で、私がどれだけの不安を感じ  
ていたか、あなた想像できるかしら」

先ほどまでの死んだような表情に、少しずつ火が灯り始めている  
のが見て取れる。安堵7割、怒り3割といったところだろうか？

多少平静を取り戻し、ランプくらい勝手に点けるよ、と言い返そ  
うとしたが、先ほどのデルテロの指令を思い出して言葉を飲んだ。  
ヴァンのいない時間帯に部屋の明かりが点いていたら面倒な事にな  
っていた。マッチのしまつてある場所が分かり辛くて助かった。

「それにこの家、ろくな食べ物がないのはどういうこと？」

そう言われて、最近ポーと外食ばかりしていたせいで台所にはコ  
ーヒー豆とウイスキー、それと数年間放置してある保存食しかない  
ことを思い出した。

「いや、あれだよ。不安で胸が一杯で、何も食べられないだろ？」

咄嗟の返答は、当然のことながら火に油を注ぐだけの結果にしか  
ならなかった。

すっかり調子を取り戻した女から散々罵りの言葉を浴びた後で、  
ようやく本題に入ることができた。

「それで、この封筒を預かってきた」

デルテロと女の関係がいまいち分からないため、手紙の主は仕事  
の関係者、と言うことにしておいた。

「これ、”あの人”からだわ」

「あの人って、いつも手紙をくれたって人のこと？」

「そうよ。ほら、この手紙微かにオリーブの花の香りがするでしょ  
？ 間違いないわ」

差し出された手紙を嗅ぐと、確かに紙以外の香りが混じっている  
ようだった。だが、花の香りなど気にしたことがないヴァンにとっ  
てオリーブとそうでない花の香りの区別などつかなかった。

「香りについては分かったよ。それで、手紙には何が書いてあるん  
だ？」

「ええっと、少し待って頂戴」

真剣な表情で手紙を読む女を、特にすることもなく見守った。や  
がて、手持ちぶさたで居心地が悪くなると、ヴァンは近くにあった  
椅子に座り、頬杖をついて時間が過ぎるのを待った。何が面白いの  
か、時折クスツと笑みをこぼす顔を眺めながら、せつせとオリーブ  
の香りを手紙につけるデルテロの姿を想像し、気持ち悪くなっ  
てすぐにやめた。

すると女は突然、満足気な顔で手紙を胸に抱きしめながら余韻に浸り始めた。

「……それで？」

いい加減待ちくたびれたヴァンが問いかけると、ようやく女が喋り出した。

「大したことは書かれてなかったわ。私の身を案じて下さった事と、引き続きあなたの下で暮らすよう書いてあっただけ」

「収穫ゼロか」

結局、状況を理解できないまま、デルテロからの指令を守るしかない。何となく予想できたとはいえ、せめて護衛の期間くらいは知りたかった。

「ねえ、この手紙をくれた人ってどんな方？ きつと素敵な方なんでしょうね」

キラキラ光る視線を真っ向に受け、ヴァンは言葉に詰まった。寡黙＋無愛想がウリの隊長は、きつと女の妄想とはかけ離れているに違いない。しかし下手なことを言って余計な反感を買っても面倒なので、どうデルテロの性格を褒めようか悩んでいると、

「 やっぱりいいわ。予め印象を聞いていたら、初めて会うときの下キドキが薄くなってしまうもの」

と、勝手に自己完結していた。

「それよりも、私お腹が空いたわ。何か買ってきて頂戴。あ、私獣臭い肉は嫌いだから。野菜のたっぷり入ったポトフにパン、それと香ばしいバターの香りがするお魚のソテーがいいわ」

半ば強引に追い出される形で家の外に放り出されたヴァンは、しぶしぶ今日三度目となる市場に向かって歩き出した。

「夕飯を指定するなんて、あいつどんな神経してんだ？」

そう愚痴をこぼしたところで、未だに相手の名前を聞いていない事に気がついた。まさかデルテロと同じファミリーネームじゃないよな？ そんな言い得も知れない場面を想像したが、何だかあほらしくなってすぐにやめた。

『奴隷貿易』

「ルビヌスよ」

市場で買ってきたスープとパン、それと鶏の燻製をほお張りながら女が名乗った。

ファミリーネームも聞いてみたが、「あなたも早く名乗りなさいよ」と話を折られた。どうやら教えるつもりはないらしい。

そもそもデルテロのファミリーネームを知らない時点で、娘かどうか検証できやしないと、ヴァンはそれ以上の追及を諦め、代わりに自分の名前を告げた。

食事が済み、コーヒーを入れてリビングに戻ってきたところでルビヌスが口を開いた。

「それで、私はこの後どうすればいいの？」

俺の方こそ知りたいさ。という内心とは裏腹に、

「まずは家から出ないようしてくれ。必要なものがあれば俺が買ってくるから。あと、君を匿っていることがバレないように、日中はできる限り大人しく過ごして欲しい」

「……私、狙われているの？」

「それは分からない。君を匿う理由について教えられていないんだ。

君の方こそ何か思い当たる節は？」

その問いかけの後、再び女はだんまりをきめこんでしまった。どうやら心当たりがあるようだったが、女の沈んだ表情を見て、無理に聞き出すことはやめた。

ふちの欠けたカップを手に取り、喉までで出かかった質問の数々をコーヒーと一緒に飲み込んだ。デルテロから受けた命令は女の保護と護衛であり、それ以上首を突っ込むよう指示されてはいない。何かを知ることが常に良い結果をもたらすとは限らない。

ヴァンは椅子から立ち上がり、カップの中身を一気に飲み干した。そして、寝室に隠してあった数枚の銀貨を取り出し、再び玄関に向かった。

「どこへ行くの？」

すっかり温くなったコーヒーを両手に持ったまま、ルビヌスが問いかけた。

「もう一度市場に行ってくる。この家には一人分の生活品しか置いてないんだ。それに今は最寒気じゃないとはいえ、每晚毛布なしで寝るのはきつい」

その言葉を聞いて、ルビヌスは、自分の持っているカップに比べてヴァンの使っていたカップがやけにみすばらしいことに気がついた。

翌日から、ヴァンとルビヌスの奇妙な生活が始まった。ヴァンは毎朝寝心地の悪いソファで目を覚ますと、二人分の朝食を準備し、

片方を食べてから城へと向かった。厄介な仕事を任されなくなったヴァンは、夕刻には城を出て、市場に寄り、食べ物やルビヌスの暇つぶしのために適当な本を買って帰った。

何度かポルトギーの食事の誘いを断るうちに「なんだ？ 女でも出来たのか？」と冷やかされるようになったが、それを適当にあしらう術を覚えた。

一方ルビヌスは昼前まで寝ているようで、遅めの朝食を食べた後、ヴァンに買ってきてもらった本を読みながら過ごしているようだ。ヴァンが帰ってくると、その日の仕事の内容や、ダルの街の話題を矢継ぎ早に質問してきた。昼まで寝ているせいだろうが、日付が変わっても喋ることをやめず、結局ヴァンが無理やり照明を落としたところで、ふて腐れながら寝室へと戻っていった。

そんな生活が一週間続いた頃、大きな動きがあった。

朝、いつもの時間に仕事場に入ると、遅刻常習犯のポルトギーが部屋の隅に置かれているソファアに寝転んでいた。

「ポー、今日はいつになく早いんだな」

「んあ？ ああ……ヴァンか」

ポルトギーのかすれた声が耳に届いた。どうやら今まで寝ていたらしい。

「どうしたんだよ？ まさか、昨日ここに泊まったのか？」

「……そのまさかだよ。今までずっと調査させられてたのさ」

そう言つと、ポルトギーはもう少し寝かせてくれと言わんばかりに、頭からすっぽり毛布に包まってしまった。

訳が分からず戸惑っていると、きいっとドアが開く音が聞こえた。

「あら、来てたの?」

振り向くと、ルチアの姿があった。首にタオルをかけ、髪が半乾きに濡れていた。

「昨夜、何かあったのか? ポーは夜通し調査したって言ってたけど?」

「先日捕まえた男がいたでしょ? 彼との取り引きに応じていた職人が判つたの」

その発言を聞いて、ヴァンは自分の脳内が非日常から日常へと引き戻されるのを感じた。

「20年以上も油石の精製を行っているミゲルという男で、子供と二人で暮らしていたわ」

「暮らしていた?」

「死んだの。私たちが駆けつけたときには、手首を切つて床に倒れていたの」

「自殺したのか?」

「さあ？　どうかしら。自殺に見せかけた他殺かもしれないし、そうじゃないかもしれない。子供から話を聞こうにも、家の中はもぬけの殻。私とポルトギーで行方不明の子を探してみたけど、見つからず。今はマルとシエーラが市場の方を探しているはずよ。そろそろ戻って来るんじゃないかしら？」

ルチアの言葉通り、30分程するとメンバーのほとんどが部屋に戻ってきた。彼らの表情から、大した成果は得られなかったのだと思っただ。

その後は各メンバーからの短い結果報告があっただけ、結局解散となった。尋ね人の搜索となると、メンバーの少ないこのチームには不利だ。デルテロが臨時で搜索隊の編成を行っているらしいが、必要以上の情報が伝わってこないのはいつものことだ。

まだ昼前なのに今日も早々に帰宅を余儀なくされたヴァンは、徐々に酒場に寄ろうかと考えたが、自分に与えられた任務を放棄するわけにもいかず、しぶしぶ帰路についた。

「あら、今日はいつにも増して早いよね」

家に入ってまず耳に届いたのは、そんなルビヌスの皮肉だった。妙に嬉しそうな顔をしているあたり余計にむかついた。

「誰かさんのお守りのおかげで、どんな事件が起きようが俺一人だけ平和な毎日さ」

相変わらずニコニコしているルビヌスの顔を見て、ここ数日溜まっていた不満がむくむくと膨れ上がった。そんなヴァンの心情をよそに、ルビヌスは言葉を続けた。

「それって素敵なことじゃない。平和な日常の何が不満なわけ？」

「俺はベビーシッターになりたかったわけじゃない。このまま何事も無い生活を続けて、園児の卒業と同時に仕事を首になっただろうしてくれるんだ？」

ルビヌスにあたるのは間違いだと気づいていながら、ヴァンの口は止まらなかった。

「そのときは、私の家で雇ってあげるわ。執事は……あなた愛想が足りないから無理ね。庭師でなら、お父様にかけてあげる」

さらっと受け流すあたり、出会ってから思っていたことだが、頭の回転は悪くないようだった。今はそれが腹立たしい。

どかっと椅子に座ると、ルビヌスは早々に寝室に引き下がった。

一人になりたいという気持ちを察してくれたのかもしれない。しかし、ルビヌスはすぐに戻ってきた。

「それでは、ベビーシッターではないあなたに、名誉あるお仕事を願いますわ」

うやうやしく一礼したルビヌスの手には、彼女の体をすっぽり覆い隠す長さのコート、そして小さな羽根飾りのついた帽子が握られていた。

「よくそんなもの見つけたな」

確か一、二年前にポーの奴から貰った土産のはずだ。自分のセンスじゃないと、寝室の奥深くにしまった記憶がある。

ルビヌスはそれをおもむろに身につけると、

「これから市場に出かけるから、私の護衛をして頂戴」

とんでもないことを言い出した。

「お前、自分の立場が分かってるのか？」

詳細は不明にしろ、ルビヌスを護衛しろと指示が出ている以上、何かしらの危険が彼女を狙っていることは間違いない。そんな状態で、人通りの激しい市場に連れて行くなど許可できるはずがなかった。

「分かっているわ。だからこそ、こうして変装して出かけるのよ。お世辞にもオシャレとは言えないけど、この際仕方ないわ。これで我慢してあげる」

そう告げると、ルビヌスはコートの裾を持ちながら自分の姿をチエックし始めた。ひらひらと舞うその姿はさすが貴族の娘といったところだが、今口にすべきは褒め言葉ではない。

「あのなあ。理由は知らないけど、君がここに住んでいること、いや、この街にいたこと自体秘密なんだ。留学してたとは言え、ばったり昔の知り合いに出会う可能性だってあるだろ？」

「それなら大丈夫よ？ 私、知り合いは少ないから」

妙に納得してしまったが、論点はそこじゃない。

「とにかく外出は我慢してくれ。欲しいものがあれば、俺が買ってくる」

「あのね、ヴァン。女性には必要なものがたくさんあるの。あなたに頼めないものだってあるのよ?」

それを言われると、反論できなかった。ルビヌスと暮らすようになってから、一度だけ女性用の服を売っている店で適当に下着を選んで買ったことがあるが、そもそもサイズが合っていたかどうかも疑わしい。統一性のかけらもない下着の数々をカウンターに持っていくときの背徳感、そして店員の営業スマイルの裏から伝わってきた疑念と嫌悪の塊。もうこりこりだった。

「あなたがいない間に勝手に市場に出かけられるのと、あなたの護衛の下で出かけるのと、どっちが良くて?」

たたみかけるようなルビヌスの気迫に、ヴァンは首を縦に振るしかなかった。

身長の高いヴァンと、一般女性と比較しても小柄な部類に入るルビヌス。片方は遠くからでも引き締まった体が際立ち、もう一人はぶかぶかのコートを纏っている。変装しないほうが目立たないんじゃないかとも思ったが、大きすぎる帽子のせいでルビヌスの目元が隠れているのは好都合だった。

市場に着くと、道の端や人の視線が店頭に釘付けになっているような場所を選んで歩いた。どこにどんな店があるのか、ここ数日で急速に知識を得たヴァンが先導する形で、二時間ほどルビヌスの買い物に付き合った。最後に立ち寄った例の下着屋の店員が、以前と

は別の人物だったのはこれ以上ない救いだっただ。

「……。もう満足か？」

久しぶりの自由を満喫したルビヌスと違って、すれ違う人ごみに注意を向け、少しでも怪しい人物を見つけるとその心の風景を読み取っていたヴァンは、最後の店を出た頃にはすっかり気疲れしていた。

「ええ、とつても満足したわ。ありがとう」

ふわつとコートを翻しながら振り向いたルビヌスの笑顔に、ほんの一瞬だけ心を奪われた気がしたが、認めてはいけない気がしたのですぐにごまかした。

「じゃあ帰るぞ。こんな目立つ場所にいたら、いつ知り合いに会うか気が気じゃない」

そう言っただルビヌスに背を向け、市場から離れようとしたときだった。人ごみのはるかかなたに見知った顔を見つけた。

「！」

やばいっ！ チラツとしか見えなかったが、今のは間違いなくデルトロだった。護衛対象を連れて市場に買い物に来たことがバレたら、間違いなく殺される。

「こっちだ！」

「え？ な、なに？」

突然のヴァンの行動に戸惑いを見せるルビヌスをよそに、その手を掴むと咄嗟にわき道に入った。「ねえ、ちょっと、何なの？」と隣でわめいているのはシカトして、商店の勝手口や無造作に置かれた粗大ごみをわき目に、一気に細い道を抜けた。

初めて通る場所にかなり不安を覚えたが、引き返してデルテロにばったり会うよりは幾分マシだと思った。

繋がれた手から少し熱を感じ出した頃、ようやく広い道に出た。

そこは、背の高い建物に周りを囲まれ、まだ日中だというのによどんだ雰囲気にもまれていた。まばらな人影の多くは下を向いて歩き、フードで顔を隠している者も多い。

道の両側には、敷物の上に商品を並べただけのシンプルな露天や、建物の一階部分を使った商店がちらほら見えた。

「よりによって、ここか……」

今まであまり市場に行ったことがなかったヴァンは、この辺りの土地勘に乏しかった。そうでなければ、ルビヌスを連れた状態で、この場所に来たりはしない。

「なんなの？　ここ？」

不安げな表情で、ルビヌスが独り言のように呟いた。

「何でもない。少し寂れた市場だよ」

ヴァンは咄嗟に嘘をついた。本当は、表で売れないような危険なシロモノが売られている場所であったが、無意味にルビヌスを怖がらせる必要はない。どうせ気を付けるべきは自分なのだから。

繋がれた手を一旦離す。そして、服やら何やらが入った紙袋を一旦床に置くと、身なりを整える振りをして銃の安全装置を解除した。ここは最低限の武装なしで歩くには無防備すぎる。

「長居するようだとこじゃないから、行くぞ」

ヴァンは、ルビヌスが被っている帽子をさらに深く被らせた。そして再びその手を取ると、ゆっくりと歩き出した。時折すれ違う人間、道の脇にいる商人、その全てに注意を向けながら歩いた。少しでも怪しい人物だと感じれば、躊躇なくその思考を読み取るようにした。こんな場所にいる奴らだけあって、淀んだ緑が照らす廃墟、無数の針で出来た小さなボールを握り締める男、鎖に繋がれた女の裸体、と、ろくなイメージがなかったが、ひとまず自分たちに向けられた敵意は感じられなかった。

真剣な眼差しで歩くヴァンを見て、ルビヌスは何も話しかけることができず、ヴァンに隠れるように歩きながら、おどおどと周囲を見渡した。大半の住民は、この裏路地とは無縁の生活を送っている。好奇心旺盛な子供でさえ、間違っってこの場所に迷い込むことはなかった。

ジトツとした汗が繋がれた手から流れ出した頃、突然一人の商人に声をかけられた。

「お客さん。その子売るんだったらうちにしな。今なら、高く買  
うよ」

ヒヒヒツと下衆な笑い声をあげる商人。その先には、男の店だろうか？ 薄暗い店内の中にくつつかの鉄の檻が見える。意図的に店の明かりを消しているのだらう。外からじゃ中の様子がはっきり見えない造りになっていた。

「この子は俺の連れだ。悪いが他をあたってくれ」

下手な厄介ごとに巻き込まれないよう、早々に立ち去ろうとした。しかし、ルビヌスはその場を動こうとしなかった。

「人が、……売られているの？」

かすれた声が聞こえた。帽子のせいで表情は見えないが、繋いだ手は震えているようだった。その視線の先は、光のない鉄格子の中に向けられていた。よく見れば、隅のほうにぼやっと影が見えた。

「おや？ 奴隷貿易を目にするのは初めてで？」

商人は、以外だと言わんばかりの表情を浮かべた。この市場に入りする人間にとってみれば、きつとこの手の商売は常識なんだろう。

「でも！ ダルでは、他国の民であっても不当に扱うことは禁じられているはずだわ」

「ほう？ よくご存知で。確かに、前国王はそのような令を下していましたがね。ですが、現在国の実権を握っておられるラインロット王子によって規制が解除されたのですよ。まあ、そのおかげでこうして堂々と商売できるようになったわけですから、王子さまさま

ですな」

それだけ言い残すと、金にならないとふんだのдарう。商人は別の客の相手に向かった。

刺激が強すぎたのか、ルビヌスは黙りこんでしまった。だが、いつまでもこの場に留まるのは良くない。

「行くぞ」

囁くようにルビヌスに告げた。しかし、ルビヌスはその場を動こうとしなかった。そうこうしてる間に、さっきの商人は新しい客相手に軽快な口調で説明を始めていた。

「実にお目が高い。あれはつい最近入ったばかりの商品でしてね。今明かりを点けますんで、是非もっと近くでご覧下さい」

商人は店の奥に入ると、ごそごそと何かをいじった。すると、暗かったはずの店内がぼんやりと明るくなり、徐々にその姿をあらわにした。

「っー！」

ビクっと、ルビヌスが驚いたのがはっきりと分かった。……暗闇の中ではわからなかったが、檻の中には、ルビヌスよりもっと幼く見える、薄いシャツのような下着だけを身につけた少女がうずくまっていた。

「近頃は、商品の質を問わず売れ行きがいい状態です。へへっ。あれだけの上玉となると、かなり値が張りますがねえ」

相変わらず下衆な笑い声を発する商人と、おびえる少女の全身をなめまわす様に見つめる客。少女の未来を想像するとキュツと胸が締め付けられたが、さっきの商人の言葉通り、他国から買い付けてきた人間の売り買いは禁止されていない。可哀相だが、目の前の売買を止めるすべはない。

何も言わず、今度は強引にルビヌスの手を引っ張って歩き出した時だった。「助けて！」そんな悲鳴にも似た叫び声と、暗い路地裏、そしてこの街でしか嗅ぐことのできない油石の独特の臭いが、ほんの一瞬見えた気がした。

歩き出した足を止め、商人の前に立つ。

「お前、あの子をどこで手に入れた？　いくら規制が緩くなっているとはいえ、合意なしの奴隷契約は処罰されることぐらい知ってるだろ？」

突然のヴァンの言葉に商人は虚を衝かれたようで、瞳孔が大きく開いた。すぐさま平静を取り戻したあたり、だてに危険な商売に手を染めているだけはあるが、一度意識にのぼった感情は用意に消し去れない。商人からは、焦り、不安、そして明らかな敵意が伝わってきた。

「へへへっ、さて、一体何のことでしょうね？　うちの店じゃ合法的に仕入れた商品しか扱っていないつもりですが。まあごく稀に、仕入れのときに使った書類をどこにしまったか忘れてしまうことはありますがね」

年は取りたくないもので。そんな台詞をつぶやきながら、商人は

別の客相手にしゃべり出した。

「お客さん。今ならあの娘、銀貨30枚でお譲りしますよ。あれだけの上玉がこの価格だなんて、うちの店以外じゃありえませんぜ」

心を読まないまでも、しつぽを掴まれる前にさっさと売り払ってしまおうという商人の魂胆がはつきりと分かった。しかし、誘拐や拉致の現場を取り押さえたならまだしも、今の状態では書類を紛失したと主張されればこの取り引きをやめさせるのは難しい。ヴァンは、どうすればこの取り引きをやめさせることができるか思考を巡らせた。

「なら……」

すると突然、ヴァンの横でおびえていたはずのルビヌスが一步前に出て言った。

「私がこの子を引き取るわ」

何を言い出すのかと思いつめたが、ヴァンが制止する間もなくルビヌスは言葉を続けた。

「銀貨30枚の代わりに、この指輪と引き換えよ」

そう言うと、ルビヌスは首の後ろに手をまわして銀色のチェーンを外した。そして胸元からチェーンに繋がれた指輪を取り出した。

細かな模様が描かれた、黄金色の指輪。

「ほほう？ 金の指輪とは珍しい。いやはや、なかなか代物です

な」

商人は近くのカウンターから天秤を持ってくると、ルビヌスの指輪を載せた。

「どうやら、間違いなく金で作られたもののように。……いいでしょう。この指輪を代金として頂戴します」

商人の顔がほころんだ。そりゃ、金の指輪なら銀貨30枚以上の価値がある。商人が喜ぶのも当然だった。

「いいのか？」

ヴァンは小声でルビヌスに問いかけた。たぶん、あの指輪は彼女にとって大切なものだったからだ。

「……」

ルビヌスは何も答えないうまま、少女がいる檻の前に行き、商人に鍵を開けさせた。そして、自分の羽織っていたコートを脱ぐと、それ少女に纏わせ、抱きしめるような形で檻から出てきた。

「もう大丈夫よ」

そんな優しい音が耳に届いた。

「安心して。私の家で一緒に暮らしましょう」

何もできなかった自分。そして奴隷制度を取り入れようとしている王国の指導者。向こう見ずなルビヌスの行動。

ヴァンは、様々な苛立ちが自分の中に湧き出ているのを感じたが、この鬱囲気を壊したくないと思い、沈み始めた夕暮れを見上げながら全てを胸の中に押し込めた。

「お前の家じゃないんだけどなあ」

また毛布なしで寝る日々が続くのかと、ヴァンは自嘲気味に笑った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4288v/>

---

王国キット

2011年12月12日08時49分発行